

## 特集

小学校時代の思い出

## 「夏休みの工作」の思い出

川口昌宏

(昭和四十二年卒業)

二〇二二年は、コロナウイルスの感染拡大の波が収まらない中、ウクライナにロシアが軍事侵攻して世界中に衝撃が広がりに続いています。その戦闘の様子や一般市民の犠牲の状況がSNSなどによりリアルタイムで世界中に拡散しています。その中には、ドローンから撮影された映像が数多くあり、過去には無かった視点から戦争の悲惨さを見せつけられます。

ドローンを見ると小学校の夏休みの宿題として作った工作を思い出します。水平にプロペラが二つついた自動車のような形の乗り物で、ホバークラフトに近い感じですが、できるだけ軽くするため、細い木で骨組みを作り、それに紙を貼り、白と青色でペイントした流線型の機体で、なかなか恰好よくできたと満足できる作品でした。

夏休みが終わり、展示室には生徒が持ち寄った作品が、所狭しと並べられています。

見渡すと、自分の作品が一番輝いて見え、優越感のようなものがじわじわと湧いてきたのを思い出します。先生も興味を示され、「これは、浮き上がるのか？」と尋ねられ、友達も「カッコイイ！」などと言ってくれて、ますます鼻が高くなったものです。そして、止めておけばよい物を、調子に乗ってギャラリィの前で試験飛行をすることとなりました。電池をつなぎ、モーターのスイッチをONに！勢いよくプロペラが回り、ブーンと風を切る音が気分を盛り上げます。

しかし、浮きません。そこで電池を増やし再度挑戦。プロペラは更に勢いよく回りますが、何故か浮きません。心の中で「頼む、浮いてくれ！」と願うも、全く浮きません。遂に諦めの宣言「おかしいな」。周囲の視線は、予選敗退した選手に向けられるもの、そして溜息（少し大げさか）。実は、作っただけで試験飛行をしてなかったのです。かくして、見てくれだけの張りぼてと化したのでした。

当時のモーターや電池は貧弱なもので、よほど工夫をしないと空中に浮き上がる物ではなかったのです。それは、とても小学生の手に負える代物ではなかったと思います。

現代のドローンは軽量で強力なモーターと高出力、大容量のバッテリー、さらに、それを制御するコンピュータと通信技術に支えられて、信じられないような飛行を見せてくれます。

ああーあの時代にこれがあったら、恥をかかなくて済んだのに…。



## 「自転車運転免許証」

高藻つゆ

(昭和四十三年卒業)

私が小学二、三年生の頃、校庭一面に石灰でかかれた仮の道路上を、自転車で走る運転試験を受けました。安全確認、発進、停車等、やるべきことはたくさんあります。皆が見ています。運転免許がもらえるかどうか、ドキドキです。厳しい審査で、私はチャレンジ一年目、免許は

もらえませんでした。免許がないと自転車には乗れないのです。今では考えられないような規則です。でも、それくらい交通ルールを守らないといけないんだと教えられていたのでしょう。私も納得していた良き時代でした。

最近、知人が自転車に乗っていて横断歩道上で事故にあいました。他人事ではありません。ちょっとした気の緩みがあるのでしょうか。誰もが加害者に、また被害者になりうる世の中です。道路法規もどんどん変化し、増えています。道路左側には自転車走行の青い矢印。横断歩道前の徐行安全確認、チリンチリンはダメ、等々。ちよつと面倒だなと思いますが、必要なことなんです。

この頃テレビでは、自転車の悪質な運転の取り締まりが話題になっていました。高校生の娘が二人乗りで注意を受けたのも仕方のないことでした。誰もが乗れる自転車です。だからこそ、安全に乗ることが求められますね。今一度、自転車運転免許証をもらった子供の頃を思い出し、安全運転を心がけたいと思います。

## 「変化の時代に」

菅生泰礼

(平成九年卒業)

私が小学生だった三十年ほど前を振り返ると、少年らしく活発に過ごしていたなあと思います。特に夏休みは朝五時半に起きてクワガタを採りに行き、ラジオ体操に出て、朝ごはんを食べ、部活に行き、昼ごはんを食べ、プール開放に行き、暗くなるまで友達と遊んで家に帰るという生活。その分宿題を後回しにしたために、後で苦勞する少年でした。

それから担任の先生が印象的でした。とても厳しい方で、よく叱る先生でした。悪いことをすれば「とろいことしとるじゃない」、動きが悪いと「のっさいことは猫の仔でもやる」、よく聞く言葉でした。また、嘘をついたり、誰かを傷つけたりするなど、人の道を外れることをした時は特に強く、時には手を上げて叱っていた姿を覚えています。反対に、良いことをした時や皆で頑張った時にはたくさん褒めてくれました。今振り返